

昭和51年度の技術の展望

昭和50年は日本の経済が非常に困難な状態に逢着し、GNP実質伸びも49年度のマイナス成長に引き続きほとんど横ばいといって差し支えない状況で推移致しました。今後の見通しについても、もう過去の高成長時代を期待することは困難で、いわゆる低成長経済というのがこれから我が国の常態の姿になると見られます。

この大きな曲り角である昭和51年を迎えて、研究開発のこれからのあり方というのが大変責任の重くなる重要な課題になってきました。日本の技術水準は過去は欧米の追随であり導入技術が大変多かったと申して過言ではありません。しかし近年に至り日本の技術水準は急速に向上し、また市場も世界を相手とするような時代となったことから、その進歩は目覚ましく、その格差は著しくつまって、肩を並べる研究開発が数多く見られるようになりました。

今後の低成長経済において量から質への経営の転換ということがよく言われています。質への転換に最も考慮されねばならないのが技術の開発であり、研究の成果を実用することの優劣が大きな分かれ目になると考えられます。

現在持っている技術というものは、それで終わったというものは決してないわけで、いかなる歴史の長い製品でも更に研究開発の余地があり、前進向上するのが常識であります。そしてまた、次の新しい研究の成果が想像もしなかったような高度の発展をもたらすのが技術の世界であります。

また、日本のような資源エネルギーの非常に少ない国では附加価値の高い、しかもその内容のよい製品が繁栄していくとも言われています。これがすなわち、技術開発に直結すると考えられており、日本の将来の大きな方向の一つとして研究開発の重要さが倍加して考慮される時代になりました。

当面私どもが直面している大きな問題としては、日本の将来のエネルギー問題の解決、非常に急速に発達している素子を含めた情報産業の問題、量産設備の高度な合理化対策などがあり、また環境整備の問題とか、特に家庭用機器に対する信頼性の向上など、研究技術への大きな期待が持たれています。

日本としては国として、また各企業一体となつての解決を必要とされる範囲もあり、また各研究所、各企業ごとにその責任を完遂しなければならない面もたくさんあると考えられます。

また、研究あるいは技術開発の国際交流ということも大切な面であつて、国内だけにとどまらず、広く外国との対等の交流、あるいは共同研究というような姿が更に増えていくことを期待する次第であります。日本の技術水準も、もうここまで来ていると見て差し支えないわけで、過去一方通行にかたよりすぎていた日本の技術をぜひここで更にもう一步前進させることを期待してやみません。

これからの日本の研究、技術開発に携わる方々は、これまでと違って一步進んだ観点のもとに、研鑽を積まれ、国民の大きな期待に沿うよう努力される事を衷心より期待して、昭和51年の御挨拶と致します。



日立製作所 取締役社長

荻山 啓 啓